

時ハ該王勅ニ就キ行政訴訟手續キテ以テ參議院ニ之ヲ訴フヲ得ス此
 レ第三百五十八項ニ引證シタル千八百二十三年二月十九日トルコ
 件千八百二十四年五月十二日ブノワ一件ニ係ル參議院判決ニ因テ既
 ニ斷定シタル者ナリ其理由如何トナレハ蓋シ恩惠申訴ニ係ル始メノ
 判決ハ行政訴件外ノ事件ニ就テ爲シタルカ故ニ該事件ヲ更ニ調査ス
 ルニ由テ爲シタル判決モ亦同一ノ部類ニ入ル可ケレハナリ
 是ニ由テ之ヲ觀レハ第四十條ニ舉ル恩惠申訴ナル者ハ國長ニ請願ス
 ルノ通權ヲ特異ノ一件ニ適施スルニ外ナラサルヲ見ヨ這様ノ申訴ノ
 結局ハ極メテ分明ニシテ即チ委員ヲ命シテ本件ヲ調査セシムル是ナ
 リ而シテ該申訴ハ行政訴訟ニ於ル如ク參議院ヨリモ寧ロ尋常ノ委員
 ノ議決ヲ聽テ其情由ヲ審明セル皇帝ニ致セルナリ然ルニ豫メ參議院
 ノ議決ヲ經タル行政文書ニ該申訴ヲ限畫セントスルハ果シ何ノ理由

第十六百三第

アルヤ決シテ之アル可カラサルナリ
 第四十條ノ規條ハ千八百五十二年十二月十八日ノ詔書出ルニ因テ殆
 ト無用ノ者トナリタリ該詔書ハ第四十條ニ就キ吾輩カ論述シタル所
 ノ者ヲ悉ク辯解セリ今其本文ヲ左ニ掲ク

國家公權ノ構成組織ニ因テ全國人民ヲシテ其權利ヲ伸ヘ其公判ヲ
 得ルノ手段ヲ設クルト雖モ或ル特異ノ場合ニ於テハ千八百六年ノ
 詔書ニ定メタル所ニ準シ國民ヨリ皇帝ニ直訴シ得ルヲ必要トスル
 ナ熟考シ且皇帝ニ直接シテ自由切實ナル訴ヲ起スノ權ヲ全國國民ニ
 擔保セシムヲ欲シ云々

第一條

參議院中ニ諸願委員ヲ置キ議長タル參議官一名訴狀扱役二名參議
 生六名ヲ以テ之ヲ構成ス可シ

第二條

凡ソ皇帝ニ上レル請願書ハ委員ニ下シ直チニ其調査ニ附ス可シ

第三條

委員長ハ每週ナレリ帝宮ニ參勤シ委員ノ處務ヲ畧述シ且ツ其奏聞ス可ヘシト信シタル起議ヲ指示セル申報ヲ上ル可シ

第四條

請願委員ハ三ヶ月コトニ更選ス可シ

第五節 訴訟入費

第三百六十一條

第四十一條 新訴訟入費表ヲ編制シ其清算方法ヲ規定スルニ至ルマテハ假リニ參議院附屬代言人ニ關シテ前條ニ舉ケタル訴訟手續ニ適施ス可キ舊法ニ遵フ可シ

第四十二條 兩造ノ旅費滞在費若クハ歸郷費并ニ一日以上ノ使吏旅

費ヲ訴訟入費ノ清算ニ加フ可カラズ

第四十三條 訴訟入費ノ清算及ヒ定額ハ行政訴訟委員ニ於テ訴訟扱役之ヲ定メ司法宰相之ヲ調査ス可シ

新訴訟入費表○此新表ハ千八百二十六年一月十八日ノ王勅ニ依テ編制セリ法律全書第二千四百八十三項ヲ看ヨ

訴訟入費支辨ヲ命スルノ法其各個人若クハ會社相互ノ訴訟ニ係ル者ハ敗訟者ヲシテ入費ヲ擔當セシメ或ハ兩造其訴フ所ノ或ル點ニ就キ互ニ勝敗アル時ハ入費ノ全部若クハ局部ヲ互消スル所ノ訴訟法第三百三十條百三十一條ノ規則ニ遵フ

此規則ハ法律ニ依リ無費ニテ參議院ニ出訴スルコトヲ許セル場合就中千八百三十三年六月二十二日ノ法律第五十三條ニ依リ州選舉ノ件ニ係ル場合ニ適施セズ

宰相若クハ宰相ニ屬スル行政官ノ自カラ原被告タル訴件ニ關シ參議院ノ判決ハ政府ノ爲メニ人民ヲシテ訴訟入費ヲ拂ハシメ又ハ人民ノ爲メニ之ヲ拂フコトヲ政府ニ命シタルコトヲ宜ク千八百三十八年内ノ參議院判決合セテ十章及ヒ千八百四十一年一月二十八日ジュニアナン件千八百四十八年二月二十六日バリー一件ニ係ル同院判決等ヲ看ル可シ而シテ此等判決ニ於テ如何ナル理由ヲ述ヘテ此ノ如クニ判斷セシヤチ左ニ見ル可シ曰ク何レノ法律モ規則モ參議院ニ對シ行政訴訟ヲ起セル行政官ヲシテ其入費ヲ拂ハシメ或ハ該行政官ノ爲メニ人民ヨリ訴訟入費ヲ出サシムルコトヲ許サ、ルヲ熟考シ云々ト千八百三十八年八月二日スシアフ此場合ニ於テ行政官若クハ其相手方タル人民ノ訴訟入費ハ現ニ之ヲ拂ヒタル者ニ於テ擔當シ彼此互消ノ法ニ遵フナリ

千八百四十九年三月三日ノ法律第四十二條ノ出ルニ及ンテ舊制ヲ變

更シタリ該條ニ從フキハ訴訟入費ニ關スル訴訟法第三百十條ハ參議院ノ行政訴訟部ニ適施ス可キナリ然レモ千八百五十二年一月二十五日ノ詔書ニ因テ千八百四十九年ノ法律ヲ廢止シタルヨリ以後參議院ハ復タ舊時ノ判決ニ從ヘリ政府ノ目代タルベルシチン氏ノ請求ヲ用非サル千八百五十二年二月二十七日ニチセル件判決千八百五十二年三月五日ドヘルモン件及爾後參議院ノヒボカーン件同年四月二日ボーンツアン件判決等ヲ看ヨ

判決ハ千八百六十三年十二月十六日アム府件ニ係ル判決ニ就キ復タ政府ノ目代タルロベル氏ノ非難スル所ト爲リタレモ遂ニ動カサレスシテ尙ホ舊ニ仍レリ

余竊カニ以爲ラク法律若クハ詔勅ナキチ以テ行政官ニ訴訟入費ヲ出スチ命シ若クハ政府ノ爲メニ人民ヨリ訴訟入費ヲ出サシム可カラストスル一理由アルノミニテ參議院ハ此ノ如クニ判決シタリト謂フ可カラス何トナレハ千八百六年ノ規則ハ未ダ曾テ人民相互ノ訴訟入費

ト官府ト人民トノ訴訟入費トノ別ヲ立テサレハナリ然ラハ則チ古來
 判決ノ眞ノ理由ハ規則第十六第十七條ニ定メタル所ニ遵ヒタルナリ
 ト余ハ思惟スルナリ蓋シ此兩條ハ政府ヲ原被告トシテ起セル訴訟ニ
 係ル特別ノ程式ヲ命セリ即チ經濟ヲ圖リ費用ヲ省クノ主意ニ出ルノ
 謂ナリ既ニ余カ道說セシ如ク政府ナル者ハ極メテ多數ノ行政訴訟ヲ
 爲ズ可キ一体ナリ隨テ最モ屢訴訟入費ヲ拂ハサルヲ得サル危機ニ會
 スル者ナリ而シテ政府ハ別ニ費用ヲ要セスシテ其利益ヲ辯護スル官
 吏ヲ有スルカ故ニ其取訟シタル時自カラ其相手方ノ訴訟入費ヲ拂フ
 可キノ困難ニ陷ラサラシメシメテ要ス何トナレハ政府ハ無費ニテ訴
 へ相手方ハ却テ貴ク拂フテ訴へ全ク互ニ其況狀ヲ同フセサレハナリ
 加之ナラス行政官ハ行政訴訟ヲ爲セル場合ニ於テ全然其權力ヲ剝カ
 ル、コナシ其故ハ行政官ハ社會ノ公益ヲ保護シテ以テ公ケノ職掌ヲ

充セルニ由リ縱令其目的ハ相異ナレモ其實ハ檢事ノ職ト相同シケレ
 ハナリ

余ハ更ニ一言ヲ加ヘテ謂フ可シ是レ羅馬法ニ於テ會計官ハ訴訟入費
 ヲ出サスシテ何事ヲ論セス皆出訴シ得ルトスル特權ノ遺習ナリト余
 著書羅馬公法行政法第
 六百二十六項ヲ看ヨ

州長ノ決定書ヲ弄權ノ者トシテ之ヲ取消シタル時州長ハ其訴ニ關係
 セサルヲ以テ其訴訟入費支辨ヲ命セラル、コナシ
 千八百五十一年五
 月二十四日ラホン

件判
 決

第三百六十三

政府若クハ行政官カ代言人ニ依頼シテ參議院ニ訴フル場合ニ於テハ
 之ヲシテ訴訟入費ヲ出サシメサル規則ヲ適施セサルヤノ問題ニ關シ
 參議院ノ判決ハ一様ナラス蓋シ昔時ハ此場合ニ於テ政府若クハ行政
 官ト其相手方トノ況狀相同キノ故ヲ以テ訴訟入費ヲ出サシメサル可カ

ラストセリ 千八百十八年十一月十八日 千八百十八年十一月十八日チエリ 件同年十二月十二日 然レ近時ノ判決ハ全ク之ト異ナレリ 千八百四十四年十一月十二日 大藏宰相件同年八月二十五日
 カブトビル件同年九月是レ政府ハ代言人チシテ代リテ辯護セシメタ
 一日イソアル件判決
 ルヒ爲メニ其他ノ特權ヲ拋棄セサルトスルニ由ル 千八百五十一年五月二十四日 ガロ
 件判 故ニ原被雙方ニ對シテ訴訟入費ヲ出ス可シト宣告スルコトナシ
 政府ノ關係スル訴訟ニ於テ訴訟入費支辨ヲ政府ニ命シ若クハ政府ノ
 爲メニ相手方ヨリ之ヲ出サシメサル所ノ規則アルカ爲メニ行政訴訟
 ノ豫審ニ就キ法律若クハ裁判官ノ命シタル鑑定費用ヲ政府若クハ其
 相手方ニ負擔セシムルノ障礙ヲ爲スナシ 千八百六十年一月十二日 相
 十三日ドアルイアル件 千八百六十二年 此新判決ハ極メテ至當ナリトス
 年二月二十七日ドバンサノ件等判決
 政府ニ訴訟入費ヲ負ハサシメサル理由中一モ鑑定費用ニ適施シ得ル
 ノ考察ヲ下ス可キ者アラス此事ニ於テ行政官ト人民トハ眞ノ平等ノ

四十六百三第

五十六百三第

六十六百三第

七十六百三第

況狀ニ在リ何レノ場合ヲ論セス各鑑定人ノ費用ハ之ヲ命シタル者ニ
 負ハシメ 特別鑑定人ノ費用ハ政府ト其相手方ト分チ負ハシムルハ不
 正トス余ハ此ノ制限ヲ立テ而シテ後ニ政府ノ關係スル訴訟ニ於テハ
 其訴訟入費ヲ宣告セサル判決ニ同意ス可シ
 政府若クハ行政官ノ原被告タル訴訟ニ於テ其費用ヲ宣告セサル判決
 ナ以テ敗訟スルニ因テ訴訟入費支辨ヲ命セラレタル州ニ推シ及ホサ
 ヲルコトヲ知ルヲ要ス 千八百四十七年五月二十一日 アノケン件
 ダレスト氏ノ説ニ據レハ代理人ニ係ル費用ヲ訴訟入費外ニ置クコトナ
 行政訴訟ニ於テ許サレス 氏著行政裁判論第六 果シテ氏ノ論ノ如クナ
 ルヒハ余ハ何ノ故ヲ以テ行政裁判官ハ訴訟法第三百三十三條ニ載スル
 極メテ至當ナル規條ノ專有權ヲ司法裁判官ニ委シタルヤナ解セス
 參議院ニ於テ訴訟ノ本案ヲ判決シテ偶々訴訟入費ニ係ル請求ヲ判決ス

ルチ遺脱シタル時ハ勝訟者ノ請ニ由テ其遺脱スル所ヲ補足シ本案判決ニ附加シテ訴訟入費ニ係ル訴ヲ判決ス必シモ別ニ敬慎ノ訴ヲ起ス
 千八百三十八年五月二十八日マシユ一件干是レ甚タ一〇。タビ
 千八百四十三年三月十一日ボツカアオン件判決
 裁○判○チ○爲○シ○タ○ル○後○ノ○裁○判○官○ハ○裁○判○官○ニ○ア○ラ○ス○ト○云○へ○ル○原○則○ニ○適○セ○サ
 ルカ如シ然レモ畢竟參議院ハ眞ノ裁判所ニ非ス或ハ某ノ關係上ニ於
 テ裁判所ノ職ヲ行フアルハ是レ公當裁判所タルナリ故ニ訴訟ノ或ル
 箇條ニ係ル判決ヲ參議院ニ於テ遺脱シタル時之ニ敬慎ノ訴ヲ爲ス
 訴訟法第四百八十條第五項ニ載スル如クスルヲ得サルニ及ンテヤ參
 議院ハ他ノ手段ヲ以テ其遺脱スル所ノ者ヲ補足シ得ルヲ正理公當ト
 大

第六節 損害要償

八十六百三第

マカレル氏ハ其行政裁判原論第一卷第九十一葉第百二十三項ニ大綱

ヲ舉ケテ曰ク參事院并ニ參議院ニ訴ヘタル者ノ求ムル損害要償ヲ宣
 告スルノ權ハ獨普通裁判所ノ有スル所ナリト而シテ二ツノ參議院判
 決ヲ援キテ之ヲ證セリ 千八百十年五月三日ラビエ一件千八百十
 八年七月二十二日ボークルソン件判決
 ハマカレル氏ノ説ノ曖昧ニ失スルヲ憾ムナリ蓋シ氏カ援キタル第一
 ノ判決ハ政府ニ屬スル森林ノ伐木落札者カ其界域ヲ超ヘテ隣人ノ林
 木ヲ伐リタル場合ニ係ル參議院ハ之ヲ判決シテ曰ク行政官ハ賣與シ
 タル伐木地ノ界域ヲ定ム可キ權アレモ隣人ニ屬スル森林ニ於テ伐リ
 タル材木ノ價格ヲ規定ス可キ權ナシ何トナレハ是レ全ク雙方ノ私利
 ニ關スル問題ナレハナリト此判決ハ頗ル其當ヲ得タリ又第二ノ判決
 ハ法ニ適シテ侵畧シテ英國人ニ轉賣セラレタル船舶ノ舊持主タルベ
 リエー氏ナル者之ヲ新所有主ヨリ勾収シテ更ニ他ニ賣與シタルヲ參
 議院ハ判決シテ曰ク船舶ノ侵略ハ固ト法ニ適スル者ナルヲ以テ舊持

主ノ之ヲ勾収賣與シタルハ其効ナシトスト而シテ兩造ヲ普通裁判所ニ廻致シ勾収ノ爲メニ生シタル損害ニ係ル裁判ヲ受ケシメタリ案スルニ是レ又勾収者ト被勾収者トノ間ニ關スル純然タル私利上ノ問題タレハナリ

然レモ吾輩ハ左ノ場合ニ於テ參議院ニ損害要償ノ訟ヲ判決ス可キ權アル可シト斷定セサル可カラスト思惟スルナリ

第一 法律若クハ規則ニ依リ明白ニ損害判決ノ權ヲ參議院ニ與ヘタル時

第二 判決ス可キ問題ノ見解ヲ以テ行政訴件中ニ織入ス可キ時吾輩ハ此等ノ適例ヲ示サンカ爲メニ千八百六年七月二十二日ノ詔書

第三十八條 第三百五十六項ヲ看ヨハ姑ク措キ先ツ左ノ數者ヲ引證ス可シ
第一 千八百六年四月二十二日ノ法律第二十一條第二節ニ曰ク參

議院ハ佛蘭西銀行ト其總會議員若クハ其使用者トノ間ニ起ル凡テノ民事上ノ處斷并ニ損害要償及ヒ廢職停職ニ就キ確定終審ノ判決ヲ行フ可シト

第二 ケステル件ニ係ル千八百三十三年八月二十七日ノ參議院判決ハ橋梁切斷ニ因テ挽車者ヨリ政府ニ求ムル損害要償ノ訴ハ普通裁判所ノ管轄ニ屬セスシテ行政裁判所ニ屬ス隨テ其終審判決ノ權ハ參議院ニ在リト判決セリ

第三 「トロワ、ボン」會社件ニ係ル千八百三十三年十一月八日ノ參議院判決ハ新橋架設ノ爲メ會社ニ於テ損害ヲ被ムリタルニ因リ政府若クハ新橋架設ノ受許與者ニ對シ償ヲ要メントシテ或ル橋梁ノ受許與者カ起セル訴訟ハ行政官ノ所管ニ屬スト

第四 千八百三十九年十二月十九日ノ參議院判決ハ行政官吏カ誤

リテ井チ覆ハサルカ爲メニ之ニ陷リテ傷チ被リタルニ因リ被害者タルロエムレー氏ニ三千フランノ損害金ヲ拂フ可シト工部宰相チ本人トスル行政官ニ命シタリ

第五 シチヌ件ニ係ル千八百四十一年一月二十八日ノ參議院判決ハ海防ノ一港ニ築設シタル寨チ破リタル損害チ估計シ其償チ破寨者ニ命シタリ

吾輩ハ更ニ尙ホ此等ノ例チ累ヌルチ得ヘシ今此引例ニ因テ之チ斷セントスレハ須ク參議院ニ裁判權ノ有無チ爭訟カ損害要償ニ及ホス所ノ況狀ニ求メスシテ爭訟ノ性質ト請求スル損害要償ノ原因トニ求ムヘシ故ニ一面ハ行政官ノ辨理スル公益ト他ノ一面ハ行政上ノ所爲ニ因テ損害チ被リタル或ル權利トノ間ニ爭訟チ生スル時ハ其損害要償ニ係ル者モ亦行政官ノ管轄ニ屬ス此損害要償ニ關シ吾輩カ參議院ノ

爲メニ辯シタル所ノ者ハ均ク參事院ニ適施ス之ヲ據證センカ爲メニハ現ニ一般ノ制定法律ノ在ルアリ即チ共和曆第八年兩月二十八日ノ法律第三節是ナリ該條ハ請負者ノ所爲ヨリ生スル損害要償チ人民ヨリ訴ヘタル時之ヲ判決スルノ權チ參事院ニ與ヘタリ況ヤ行政上ノ所爲ヨリ生スル損害要償ノ訴チ判決スルニ於テチヤ參事院ニ其權アル可キヲ殆ト論チ待タサルナリ第七百四條此共和曆第八年法律ノ本文ハ亦參事院ノ管轄ニ屬スル訴件チ控訴院トシテ判決スル參議院ニ適施ス然レモ參事院及ヒ參議院ハ普通法ノ主義ヨリ責任ノ原因チ生シ且ツ政府ニ於テ行政者タルノ分限チ以テスルヨリハ寧ロ所有主若クハ借主タルノ分限チ以テ施爲スル時ニ臨ミ判決チ行フノ權チカナル可シ是故ニ左ノ場合ニ於テ裁判チ爲スノ權ハ獨リ普通裁判所ニ在リ

第一 政府若クハ其代理者ノ借受シタル建物ノ燒失ニ由テ生シタ

ル損害ノ責ニ任ス可キ訴訟ニシテ其民法第七百三十三條ニ定
メタル法律上ノ推測ニ基ク者ヲ裁判スルヲ千八百六十二年二月
十八日ラバテル子ル
保險會社
件判決

第二 官有森林ノ燒失ニ因テ生シタル損害要償ノ訴即チ失錯シタ
ル本人若クハ官有森林ノ監守ニ任スル屬吏ニ於テ失錯ノ責ニ任
ス可シトスル民法第一千三百八十二第一千三百八十四條ニ揭ケタル

主義ニ據レル訴訟ヲ裁判スル事千八百六十四年二月二十
五日ルイナール件判決

第九十六百三第

參議院ハ行政訴訟ノ判決ヲ爲スニ當リ街路ヲ高クスルニ因テ或ル所
有ニ生シタル損害ヲ止メシムル爲メ及ヒ此損害ノ再ヒ生スルヲ豫
防スル爲メニ邑ニ於テ執行ス可キ工事ヲ併セ命スルノ權ナシ但シ邑
ヨリ此等ノ工事ヲ執行セシム可シト申告スル時ト雖モ亦然リ千八百
年十二月二十九日
ルトシエ件判決 若シ參議院ニ於テ之ヲ併セ命スル時ハ工事ノ便否
五十九

利益ヲ勘査シ及ヒ邑ニ於テ此等工事ヲ執行セシムルニハ必要ナル手
段方法ヲ有スルヤ否ヤヲ知ラントスルノ事ノミヲ以テ既ニ純然タル
行政官ノ權限ニ侵入スルニ至ル可シ今吾輩カ邑ニ就テ論スル者ハ均
ク州及ヒ政府ニ適施ス可シ蓋シ工業ノ愈々重要ナルニ隨ヒ損害ヲ償フ
タメノ造築ヲ自カラ命令スルヲ行政訴訟ノ最上等法術トシテ從事
スル參議院ニ禁スルヲ必要トス吾輩ハ後篇ニ於テ參事院ノ事ヲ論述
スルニ臨ミ此等ノ點ニ關シテ確的ナル參議院判決アルヲ掲記ス可
シ

第四款

第一節 參議院附屬代官ノ事

(提要)第三百七十 參議院附屬代官ノ代訴及ヒ口頭辯論ノ專占權

第三百七十一 參議院附屬使吏ノ送達ノ方法

第四十四條 參議院附屬代理人ハ本年六月十一日ノ詔書ニ依準シ行政訴訟委員ニ對シテ凡テノ豫審及ヒ訴訟手續ニ係ル文書ヲ作ルノ特權ヲ有ス可シ

代訴ノ特權ヲ參議院附屬代理人ニ與ヘタルハ種々ノ理由アリテ然ルナリ請フ之ヲ辯セン曰ク該特權ハ以テ訴者タル本人ヨリ或ハ事實不認ノ訴ヲ起シ之カ爲メニ代理人ヲシテ危險ノ地位ニ陥ラシメンヲ慮リ現ニ訴フル本人ノ人違ヒニ非サルヲ參議院ニ擔保スルカ爲メナリ曰ク學識方正及ヒ金錢上ニ係ル責任ヲ訴者ニ擔保スルカ爲メナリ曰ク參議院ノ調査ニ附シタル訴件ニ務メテ至當ノ豫審ヲ得セシムルヲ目的トスルナリ蓋シ古來ヨリノ經驗ニ因テ鑑ミレハ此精選ノ代言社會ヲ創設シタル理由ノ果シテ其期スル所ニ違ハサルヲ知ル參議院附屬代理人ハ本院ニ對シテ口頭辯論ヲ爲スノ特權ヲ有スルヤ

ノ問題ニ就キ之ヲ否トスル者ハ千八百六十六年六月十一日ノ詔書第三十三條ニ此等代理人ハ獨リ凡テノ行政訴件ニ係リ訴者ノ覺書及ヒ訴狀ニ署名スルノ權ヲ有ス可シトアルヲ援テ其論ヲ主張セリ蓋シ論者ハ謂フ可シ此第三十三條ニハ同年七月二十二日ノ詔書第四十四條ト同ク口頭辯論ノ專占權ヲ揚ケス故ニ其權ハ此代理人ニ屬セスト此論者ニ答ヘントスルキハ口頭辯論ノ權ナル者ハ千八百三十一年二月十二日ノ王勅ニ依リ訟廷公行ノ法ヲ定メテ後始メテ生シタルヲ以テセサル可カラス又千七百八十九年前ハ參議院附屬代理人タル者王家ニ對スル訴訟ニ於テ辯論シ及ヒ筆記スルノ特權及ヒ凡テノ裁判所ニ於ル他ノ代理人等ト競争スルノ特權ヲ享受セリトメラン氏著公判類聚第二行及ヒダレスト氏著行千八百五十二年一月二十五日ノ詔書第二政裁判論第九十九葉ヲ看ミ十條ニ亦云ク訴者ノ代理人ハ口頭辯論ヲ爲スヲ得ルト訴者ノ代理人

トハ即チ千八百六年ノ詔書第一條ニ依準シテ設置シタル代理人ノ謂ナリ

參議院附屬代理人ハ參議院及ヒ破毀法院ニ非サル他ノ裁判所ニ申訴ヲ爲スノ權アリヤ余ハ此權アリトセス何トナレハ該代理人ハ全ク參議院兼破毀法院附屬代理人タルノミナレハナリ夫レ該代理人ハ參議院及ヒ破毀法院ニ於テ代訴并ニ辯論ノ專占權ヲ有スルトスルキハ其兩院ノミニ從事シ他ノ代理人ニ於テ敢テ我カ領地ヲ掠メサレハ我モ亦他ノ代理人ノ領地ヲ掠メサルヲ正當トス故ニ彼此各得テ其界域ヲ踰越ス可カラサル所ノ居所アルナリ

被告タル行政官ニ於テ代理人ヲ置キテ自カラ代ラシメタル時原告ハ訴狀及ヒ其他ノ豫審文書ヲ該代理人ニ送達スルヲ要セス唯之ヲ行政訴訟部ノ書記局ニ呈スレハ乃チ足ル此書記局ニ呈スル者ハ千八百六

年七月二十二日ノ規則第十七條ニ準シテ送達スルト同一ノ効アル可

シ是故ニ若シ此手續ヲ履踐セスシテ原告ヨリ訴狀并ニ覺書等ヲ行政官ノ代理人ニ送達スルキ其費用ハ自カラ支辨シタル他ノ訴訟費ト同ク原告ニ於テ之ヲ擔當ス可シ千八百五十四年五月二十四日ガロイ件判決

第四十五條 何レノ覺書ヲ印刷スルモ其稅ヲ課ス可カラス又記録ハ訴訟ノ豫審ニ充分ナリト看做ス可キ葉數ニ限畫ス可シ

第四十六條 訴狀及ヒ覺書ハ中字ニテ正確且ツ明瞭ニ筆記シ少クモ每葉ニ五十行以上毎行ニ十二綴以上タル可シ凡ソ成規ノ行數及ヒ綴數ニ滿タサル紙葉ハ全ク塗抹シ而シテ代理人ハ此等不法ノ紙葉ノ代價トシテ領受シタル金額ヲ還償ス可シ

第四十七條 訴狀覺書若クハ其他ノ文書等相手方ニ送達スル副本ハ正確且ツ明瞭ニ謄寫ス可シ但シ副本ニ適合スルヲ要シ代理人其責

ニ任ス可シ

第四十八條 參議院附屬代言人ノ署名シタル兩造ノ文書ハ印紙ニ記
ス可シ

兩造ヨリ出セル文書ニ記録稅ヲ課ス可カラス但シ一通ニ付二フ。ラ。
ンノ定稅ヲ徵スル使吏ノ送達書ハ此限ニ非ス

然レモ參議院ニ出セル文書中他ノ法院ニ於テ記録稅ヲ徵ス可キ慣
例アル者ハ亦該稅ヲ課ス可シ

參議院ニ出セル文書中其性質ニ因テ定期限内ニ記録ヲ請フ可キ者
ハ亦定稅ヲ出ササル可カラス

二フ。ラ。○千八百十六年四月二十八日ノ法律第四十五條第一項ニ依
リ二フ。ラ。ンヲ改メテ五フ。ラ。ントシタリ

第四十九條 參議院附屬代言人ハ規則ニ背キタル場合ニ於テ臨機前

ニ載セタル罰ヲ受クルコトアル可シ殊ニ行政訴件ニ非サル者ヲ行政
訴件ナリトシテ訴出シ若クハ他ノ官衙ノ管轄ニ屬ス可キ訴件ヲ參

議院ニ訴出スル場合ニ於テ之ヲ命ス可シ

前ニ載セタル罰○第三十二條ニ掲ケタル罰金及ヒ停職若クハ廢職ヲ
謂フ

參議院ハ之ニ訴出スル事件ニ關シ其職域ヲ超ヘタル代書師千八百二

月十九日ル若クハ邑政ヲ損害スル邑長千八百三十二年三月訴訟入

費支辨ヲ命スルコトヲ許セル訴訟法第百三十二條ヲ適施セリ

參議院ハ亦訴訟法第千三十六條ニ依リ裁判所ニ於テ訴訟審理中ニ訟

廷取締ヲ宣告シ千八百二十三年六月四若クハ不正ノ書類ヲ廢滅スル

ノ權ヲ用ユ千八百三十三年十月三

罰金停職若クハ廢職ハ皆刑罰ナリ此等ノ刑罰ヲ科セントスレハ代言

人ニ於テ先ツ故意ニ財賄ヲ私シ若クハ重大ナル失錯アルヲ要ス若シ
或ハ然ラサレハ代言人等ハ常ニ罰金及ヒ停職ヲ命セラル、ノ虞アリ
テ一日モ安ニスルヲ能ハサル可シ行政訴件ト非行政訴件ノ區別ヲ認
ムルヲハ行政裁判官ト司法裁判官トノ權限ヲ區別スルニ於ルト同ク
甚タ難キヲ此ノ如シ

第五十條 參議院附屬代言人ハ司法卿ニ對シテ誓ヲ立ツ可シ

第二節 參議院附屬使吏

第三百七十一

第五十一條 甲ノ代言人ヨリ乙ノ代言人ヘノ送達及ヒ巴里府内ニ住
所ヲ占ムル訴者ヘノ送達ハ參議院附屬使吏ニ於テ之ヲ爲スヘシ
巴里府内ニ住所ヲ占ムル訴者ヘノ送達○本條ヲ第四條末節ノ前項及
ヒ千八百六年四月十七日ノ詔書ニ參互考察スルルハ千八百六年七月
二十二日ノ詔書第十一條ニ用キタル「ノチフイエ」ノ送達ヲル語ノ意味ニ就

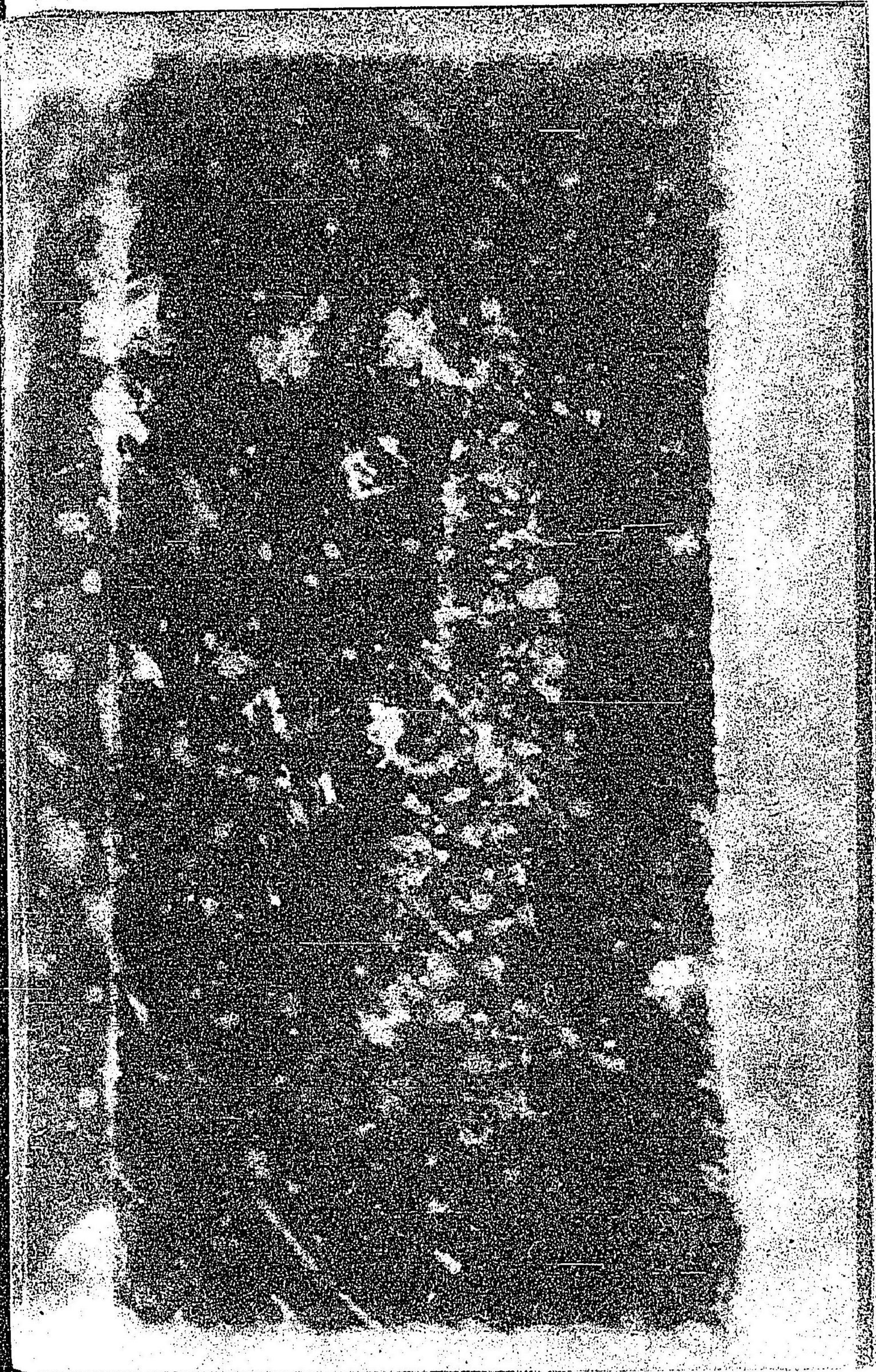
キ數年來想出シタル論辯ノ大ニ參議院ノ判決ヲ錯亂セシ者ノ根據ナ
キヲ明明白ニ證ス可シ蓋シ行政法ノ基礎ハ千八百六年ノ詔書第十一
條ノ見解ニ關シ參議院ノ大ニ驚動セシカ爲メニ頗ル搖カサレ遂ニ所
謂行政法ナル者ハ果シテ眞ニ法律ノ一枝ナルヤ否ヤヲ疑訝スル者ア
ルニ及ヒタリ夫レ參事院決定書ノ送達方法即チ該判決書ニ控訴ス可
カラサル裁判タル力ヲ與フルニ必要ナル方法如何ヲ知了セサル間ハ
參事院ノ訟廷公行ノ美法ヨリ望ム可キ惠福ハ殆ト徒事ニ屬セントス
凡ソ確定ノ基礎ナキ參議院判決ハ恰モ石炭ヲ備ヘス針路ヲ定メスシ
テ海洋ニ在ル所ノ漁船ニ異ナラサルナリ
第五十一條ノ「訴者」ト云ヘル語ヲ第十六第十七條ニ參互玩味スレハ
行政官ノ送達セシム可キ文書ハ使吏ニ頼リテ之ヲ行フヲ必要トセス
唯行政上ノ程式ニ準シテ乃チ足ルヲ證ス可シ

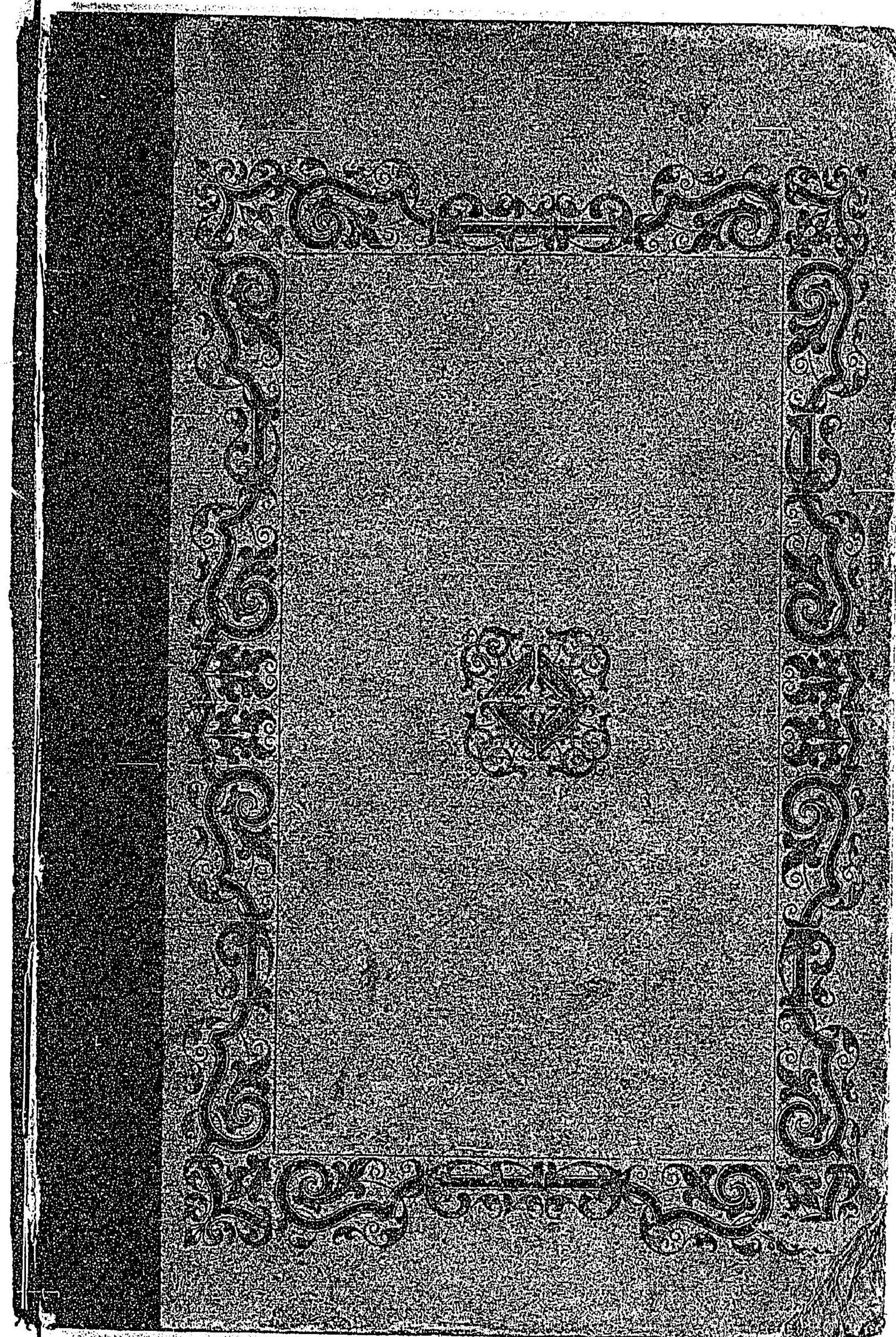
一七〇
氏ニ
行政訴訟論第一卷畢

明治十八年五月三十日版權屆

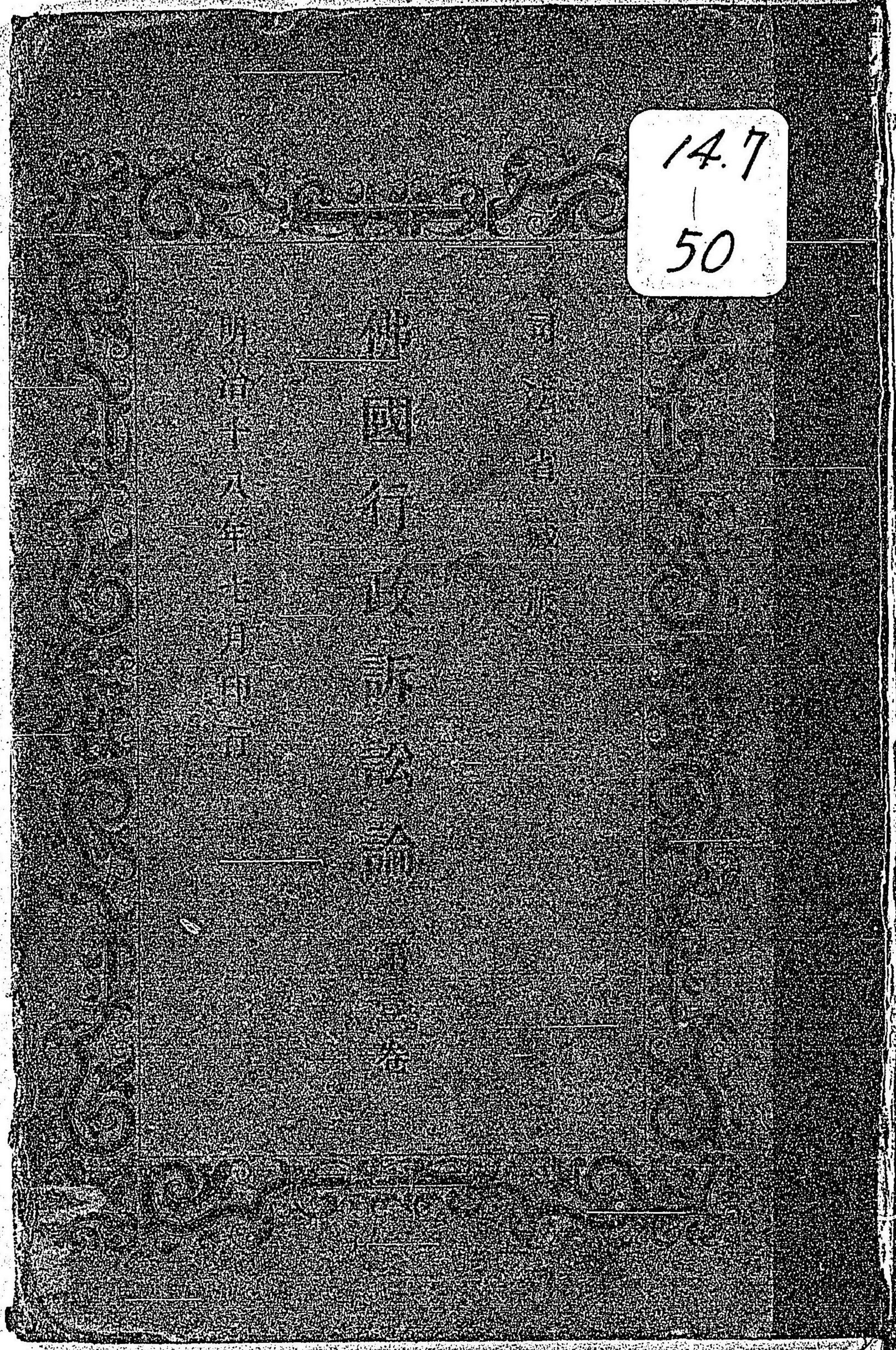
14

50





14.7
|
50



036506-001-1

14.7-50

仏国行政訴訟論

セリニー/著

M18-19

BBR-0235

